

## 一橋の女性たち

各界で、ユニークでエネルギッシュな人材が豊富と評判の一橋の女性たち、その活躍分野は多岐にわたっています。

彼女たちは、いかにキャリア構築し、どのような人生のビジョンを抱いているのか？

HQでは、連載で一橋の女性たちをご紹介します。第7回は、

NHK首都圏放送センターにてディレクターとして活躍する矢倉真理子さんにご登場いただきました。

聞き手は、編集委員、社会学研究科の足羽與志子です。

絶対に譲れない何かを持ち続ける。  
自分の中に「核」を持つことが、  
番組制作に欠かせないことなのだと、信じています

事実をその人の肉声で伝えたい  
そして報道を選びました

**足羽** 矢倉さんはアメリカの高校を卒業され、帰国後、他大学を経て一橋大学に入学されました。なぜ一橋を選んだのですか。

**矢倉** 私は幼い頃から中学3年から高校3年までの二度、アメリカで暮らしました。高校時代、絵画と人類学に興味があったので、ダブルメジャーが可能なアメリカで進学したいと思っていましたが、親が勧告で日本へ帰国。中3でアメリカへ行き、ものすごく苦労しましたから、もう親の都合に翻弄されたくないという気持ちもありましたし（笑）。親とバトルを繰り返したのですが、結局「日本人ともアメリカ人ともつかない人間になってはいけない」という親の言葉に従ったわけです。当時は反発しましたが、いまではよかったと思っています。

I CUへ入学しましたが、周りは自分と同タイプの帰国子女ばかり。これでは日本に帰って来た意味がないと思ったんです。東京生まれの東京育ちだから、日本全国から学生が集まる大学で学びたい。それも日本の若者のあるべき道を歩んできた人たちがいる大学がいいと、選んだのが一橋でした。社会学部は最初から志望して、帰国子女の試験を受けました。私は人と会うことがとても好き。人間に会える学問を学びたいということも理由の一つでした。

**足羽** 人が好き、人間に強い関心があるということが、現在の仕事につながっているのでしょうか。最初からTV報道志望？他のメディアは考えなかったのですか。

**矢倉** 考えましたが、その人の今を映像と肉声で伝えたいという思

矢倉真理子（やぐら・まりこ）

日本放送協会（NHK）首都圏放送センター ディレクター  
1977年生まれ。2000年、社会学部卒。NHKに入社。  
同年9月から約3年間、名古屋支局。2004年7月から現職。



いが強かったのでTV局を選びました。面接で「人に会いたい。いろいろな人と出会い、そこで発見したものを伝える仕事がしたい」と主張したせいでしょうか、最初から報道部配属でした。NHKはいい意味で鷹揚な組織で、新人ディレクターの企画でも面白い、意義がある、と認められればやらせてくれます。もちろん、ポツになる企画も多いですが(笑)。

**足羽** 仕事はかなりハードそうですね。ディレクターの役割はどこまでなんですか。

**矢倉** 私が所属する首都圏放送センターは関東・甲信越が放送エリアで、報道ドキュメンタリー番組や地域の話題などを制作しています。ディレクターは何をテーマに、どういう人を取材するか、どこでカメラを回し、どこで止めるのか、その番組に関しては権限と責任を負います。自分の部署以外の番組も制作します。「クローズアップ現代」は今編集中。5分程度のものはしょっちゅうつくりまします。編集作業で半分徹夜もありますし、いきなり1ヶ月、出張に行ってこいと言われることもある(笑)。先月も、中越地震の被災地でずっと取材をしていました。確かにハードですが、苦にはならないですね。

ただ、先のことを考えると、自分はどういう選択をするんだろうと思うことはあります。第一線、特に報道の現場にいる限り時間的に不規則すぎて、子育てとの両立は難しいですから。先輩にとっても素晴らしい女性ディレクターがいるのですが、彼女は子どもは産まないという選択をしている。産休等の制度はありますが…。でも、先のことは先のこと。いまはとにかく自分を成長させることに全力投球です。

**足羽** 矢倉さんは番組をつくる時、女性の視点のようなものを意識していますか。番組のなかにはわざとそれを強調するものもありますね。でもそれは男性がイメージした「女性の視点」であることが多いのですが。

**矢倉** 私は、一人の人間としての目線で勝負したいと思っています。番組づくりの上でも社内でも女性を意識したことはありませんね。ときたま、取材相手に対して、こんな若い女性でいいのかしらと思うことはありますけど。あとは、お年寄りと同様になりやすいことぐらいかな。一緒にお酒を飲んだりすると喜んでもらえます(笑)。



## 極限状態の中で戦っている人がいる その事実を、伝えたい

**足羽** 矢倉さんはいま入社6年目。昨年名古屋支局から東京に移られました。ところでご自分の企画でつくった番組は何本ぐらいありますか。

**矢倉** いま手がけているのをのぞいて、13本です。なかには2年ぐらい「やりたいです」と言い続けて実らせたものもあります。

**足羽** 矢倉さんが仕事に前向きで充実感を感じることが伝わってきますが、仕事のどんなところに一番手応えを感じていますか。

**矢倉** この仕事を選んでよかったという意味では、想像もしていなかった世界や通常なら考えられないような場面に立ち会えることでしょうか。「こういう現実があるんだ」と思います。私は、極限状況のなか



で戦っている人がいることを伝えたいんです。例えば、私は名古屋時代に虐待外来治療に通う母と子を追った番組をつくりました。そのお母さんは、子どもにすさまじい言葉の暴力を投げつけてしまう。言葉が発せられた瞬間、子どもは凍りついてしまいます。その虐待のなかで、子どもは乖離性人格障害になってしまった。親子を一時的に引き離して両方を休ませようとの専門家の判断で、子どもを入院させることになったんです。そうしたらその子が、「お母さん、私を忘れないでね」と、母親に絵を手渡ししたんです。いまは二人とも元気

になり、昨年、名古屋から東京に転勤するとき、「また遊びに来てね」と満面の笑みをたたえた写真を渡してくれました。嬉しかったですね。

でも、番組をつくっていることに迷いがなければありません。私は、取材対象である人に託してしか、表現することができません。自分は結局目の前で起きていることを伝えるだけで、なんにもできないんだ、という思いにかられることも多いですね。

**足羽** 何をどう伝えるかという問題もありますが、その前に、報道のある種の境界があるでしょう。ここは超えてはいけない、でももう一歩超えたいというような。その境界線をどう思いますか。

**矢倉** これ以上カメラを回してはダメというところを、いかに止められるかが大事だと思っています。じゃあ、その基準は何なのか。自分の良心に照らしてつくっていくしかないと思っています。



足羽與志子 (あしわ・よしこ)  
社会学研究科教授

**足羽** 良心が常に試され問われている状況ですね。ところで、良心をもつ一人といっても組織の一部でもある。NHKという巨大な組織の力は感じていますか。

**矢倉** ひしひしと感じます。取材などでも、私のような20代の女性にキチンと対応してくれるのは、NHKの看板があるから、というのは事実です。自分がつくっているという思いはありますが、権威の傘を借りているからこそできるんですね。このことは決して忘れてはいけない事実だと思います。

**足羽** それは報道する側の責任の重さといっているのでしょうか？

**矢倉** そうですね…。自分のメッセージを過信してはいけないということだと思います。NHKという公共放送の看板があるからできていることがたくさんある。私自身にとっては、いままで生きてきたなかで見えなかった世界が見られるというのは非常にありがたいと思っています。これも名古屋時代の話なんですが、養護学校は教員数が少なく、先生の負担が非常に重いということを番組で取り上げました。2カ月後に愛知県が条例を変え、教員を増やしたんですね。実際は番組の効果がどうかわかりませんが、そうだと自惚れないとやってられない面もある(笑)。

**足羽** 真剣に一つ一つの番組にとりくまれています。放映後のお気持ちは？

**矢倉** 満足するのは100年早いと思っています。会ったときにこういったのはまずかったんじゃないか、こういう尋ね方の方が良かったんじゃないかと、撮り終えた瞬間からすべての時間が後悔ばかり。でも、だから面白いんです。私が大学で学んだのは、問題を見つけるということでしたが、まさにそうだといま強く感じています。



見た人がどう受け止めているのかがわからない。  
そこに恐さがある

**足羽** 自分の番組の影響力ということも意識されるのではないですか。公共放送という影響力の強い立場ですから、「こういうことはいけません」「これは良いことです」「これは楽しい」などと世の中のスタンダードやモラルをつくってしまうこともありうるでしょう。ときには楽しみ方さえも。矢倉さんの良心や規矩が視聴者の規矩となる。

**矢倉** 正直いって、その怖さはすごく感じています。1%の視聴率といっても何百万人もの人が見ているわけですし、見た人がどう感じたのか、直接的な反応はほとんど返ってこないんです。モニターのレポートや友人に感想を聞くくらいしか、見た人がどう受け止めたのかわからないわけですし。

**足羽** 報道の中立性、報道と個のあり方は難しい問題を含んでいます。報道することが悪平等を生み出す、あるいは報道しないことによって世論をリードしていくことが、現実問題としてありうるわけですから。例えば9.11以降日本でも世界に連動した平和行進が何度もあったので

すが、テレビ報道はほとんどありませんでした。

**矢倉** 戦争に賛成の人は一人もいないのに、組織となるとなぜやらないのか、なぜなのかは率直に言ってわかりません。無意識の自己規制が働くのかどうか…。あまりに当然のことだと思っているから、結果として動かないのか…。

**足羽** こうした問題は、報道に限らず組織というものが本質的にもっている問題でもありますね。大学という教育と研究の組織の中にいて、一研究者として常々私も感じているところです。

**矢倉** いま言えることは、その問題に限らず「何でなんだろう」と思いつづけながら、もっと核心に近づけるように修業していきたいということ。番組制作に携わったときから、私

は、絶対に譲れないものを持ちつづけよう、持ちつづけられなくなったら辞めようと思ってきました。番組をつくるためには自分のなかの「核」のようなものが必要だと思うんです。番組をつくるときは、そのとき自分が出せる最高の「核」を出す。多くの人に会い、本を読み、情報にふれることで、その「核」をもっともっと磨いていきます。死んでも育てるぞ、という気持ちです(笑)。

**足羽** 最後に、矢倉さんの今後の夢は？

**矢倉** 人間はみんな、それぞれがそれぞれのギリギリのところできていると思います。どんなかたちであれ、ギリギリのところまで戦っている人たちの生きざまを皆さんに見てもらいたい。そして、それを通じて、自分も成長していく。これが、いま一番、私が願っていることです。

対談を終えて

インタビューでの矢倉さんの答えはすべて真正面からの直球。けっしてはぐらかさない。しかも質問を何倍にも深めた答え。相手に切り込むというよりも、相手の話を受け止め、それへの自分の

考えを確かめつつ、自分の言葉で忠実に語ろうとするその真摯さ。そして時折の破顔一笑。これが取材先の人の心をうつのでしょうか。大型組織の倫理破綻の蔓延は、社会に批判力の減退をもたらす。それが全体主義的土壌形成と無関係でないことは歴史が示す。ましてや組織内の個人の価値基準が

組織の力に鈍磨しないでいることはきわめて難しい。彼女の理想は、柔軟かつ揺らぎのない自分の「核」を養い、組織にあっても人として生きること。「それができなければ辞める」と明快に言い切る。けっして平坦ではない長い道程を行く若鹿のようなスタートです。(足羽與志子)